【特集】海軍舞鶴鎮守府開庁120年

引き継ぎたい赤れんが物語（ロード）

赤れんがロードで馬場さんに説明を受ける

赤れんがが「すごい」と発見 まちのシンボルに

舞鶴のシンボルの一つ「赤れんが」。元は海軍が武器や弾薬を保管する倉庫だった。35年ほど前には取り壊して、別のものにする案も。貴重な文化遺産としてまちのシンボルになるまでには、取り壊しを阻止し、保存・活用するため、陰で奮闘した、多くの人の物語があった。

昭和63（1988）年に、市の若手職員75人の自主研究グループ「舞鶴市まちづくり推進調査研究会（まち研）」が発足。グループに分かれて議論する中で「舞鶴を魅力ある都市にするために」を基本テーマとする都市の個性化グループが動き出した。模索を続ける中、当時、同じように市民の自主グループが活動し、赤れんが倉庫を核としたまちづくり計画を展開する横浜市を視察。交流する中で「赤れんが倉庫が多数現存し、直接触れられるところにあることは素晴らしいこと」と気付き、赤れんが施設を活用したまちづくり活動が始まった。まち研の有志で「まいづる建築探偵団」を結成し、調査を行い、ライトアップを実施した。また、神崎で全国5例目となるホフマン式輪環窯を発見。シンポジウム、ジャズ祭、赤れんがネットワーク総会と大型イベントをたて続けに成功させる中、市では世界初となるれんがを展示する「赤れんが博物館」を平成5（1993）年に開館した。

その後も、市政記念館や智恵蔵の開館、市民活動で倉庫群の道「赤れんがロード」の発掘を進め、市民全体に赤れんがは定着していき、昨年実施した市民アンケートでは「おすすめしたい舞鶴の観光地や施設」の高校生第1位、高校生以外の市民第2位となった。

各所に見える赤れんが

赤煉瓦倶楽部・舞鶴の活動もあり、官民関わらず赤れんがをキーワードに多くの人が活動してきた。その中で市内各所で発見されてきた赤れんが施設は100件を超える。北吸トンネルは鉄道として使われてきた原型を残しつつ遊歩道として親しまれ、砲台跡は映画のロケ地になっている。ほかにも鉄道の橋脚、造船所の施設（工場やドック）、神社の手水舎（てみずや）など市域全域に広く分布している。

建設当時、まだセメントが希少で高価だったため、土から作られるれんがが、火災に強く最も強固な建築材料として、海軍施設の建設に使われ、戦後もその多くが倉庫として現役で使用されてきたことで全国的にも特筆すべき数の赤れんがの建造物が現存する。

赤煉瓦倶楽部・舞鶴
馬場 英男さん

市職員として横浜市へ視察に行くと、現地の担当者はとても親身に話をしてくれました。舞鶴の赤れんが活用にたくさんのアドバイスをしてくれ、時には駆け付けてくれることも。当時はメールもなく文通でのやりとりでした。熱心にやりとりをするものだから、妻から横浜に恋人ができたと勘違いされました（笑）。

貴重な財産「赤れんが」を愛する者が互いに交流し、情報交換でき、市民がまちづくりに参加できる組織「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」も立ち上げました。自分たちだけではその価値になかなか気付けませんでしたが、よその人の目で見てもらうとその価値に気付くことができました。ジャズ祭の開催や赤れんが博物館に四大文明のれんがが展示できたことも、人のつながりがあったからこそでした。関わってくれた人には感謝しています。

ヒロベ薬局店主の
廣部 修さん

ヒロベ薬局は121年続いていて、私は祖父から継いできた3代目の店主です。倉庫には赤れんがが使われています。これは当時、汲み取り式便所だった頃に使っていた、かめに入った塩酸や硫酸を保管するために作られており、当時の毒物の保管に一番優れていた資材だったのだと思います。その時はビン容器もなかったので、かめで保管するしかなく、倉庫の役割も重要でした。

昔は鉄道が近くを通っていて、役所に寄ったときも、すぐ隣に汽車が停まっていたのを記憶しています。駅近くの薬局として祖父も開業し、今までたくさんの来店があったのだと思います。個人からの相談を受け、その人に合う薬を提供する相談薬局として、相談された方が前向きになれるよう一人ひとりを大切にした仕事をしています。